

# 「ガネフォ」から56年

ローマオリンピック水球

山本 健 (84歳)

(慶応義塾大学出身)

ガネフォ参加という歴史的快挙から、50周年に記念誌が刊行され、さらに5年の歳月が過ぎて昨年11月に55周年をお祝いした。

そして、今年は2020年に開催する第32回東京オリンピックの前年となり、ちょうどタイミング的にもガネフォに出場した年と同じ環境となる本年に、ガネフォの最終本を発刊しようとしている。

当時活躍した選手たちは、その思い出とともに、社会に貢献し、人生の目標を達成し、悠々自適の生活を楽しんでいるように見える。

当時我々が目指したものは、単なるスポーツ交流だけではなく、敗戦後間もない日本が、国を挙げて力を回復しつつあるとともに、時の日本政府指導者から、スポーツ選手によるアジア諸国への協力要請であり、白人社会が牛耳るスポーツ指導層への挑戦でもあった。そして連盟を脱退しても勇気ある行動を見せた選手たちに、心ある人たちはその真意を知るにつけ、密かに熱い思いを抱いていたのである。

時を経て、折に触れアジア諸国との接触が伝えられるとき、何かと親日的な態度を見せられることが多い。歴史の隅々でたまに遭遇する親日感のいしずえは、ガネフォ選手たちの実績もその肥料としているように思われる。

例えば、競争入札で安価な中国製に勝った日本の新幹線であったり、韓国人が造った慰安婦像の撤去、また個人ではカンボジアやシンガポールでの尊敬に近い親日感覚との出会い、さらに最近ではNHK番組に出てくる、中村屋でのアジア志士の保護生活応援など、多岐にわたり触れることができる。諸事情からガネフォ参加がメディアに登場することはまれであったにしろ、その歴史的意義、功績は厳然とした事実として永久に残り、讃えられるものであるがゆえに、この記録を次世代に残し、伝えられるべきだと思う。

一過性のオリンピック記録などが、塗り替えられ忘れられていくことに引換え、歴史に残した偉業は、後年になるほど光り輝く部分もある。ガネフォが世界4位の人口国であるインドネシアと我が国との友好に、未来永久にわたり役立ってい

くことは、当時決然として参加した選手諸君の男子一生の本懐であると讃えられるべきであると思う。

また、現在存命中の選手たちがガネフォ会の名のもとに毎年交流を図り、いまだに熱い思いを温めあっていることも称賛に値する。同調者を含め、多彩な賛同者の集まりが、長く続くよう願うとともに、選手諸兄の長寿ご多幸を祈りたいと思う。



2018年8月 撮影